

【日文研究室だより】

二〇一四年度は日本文学会の創立六〇周年にあたる記念すべき年であった。学域制に移行してから日本文学専攻、日本文化情報学専攻双方が有機的に関連し合いながら、それぞれの特徴を発揮して順調に発展していることは何よりのことと教員、スタッフ一同喜んでいいる。それは何よりもこの六〇年の積み重ねがあるからこそで、そのことを深く感じる一年ともなった。

日本文学会の第五八回大会は六月八日に開催された。創立六〇周年にあたる年だったため、記念大会として、通常の研究発表のほか、ワークショップ、パネルディスカッションを行った。パネルディスカッションではカルガリー大学の楊曉捷教授をお招きして、「京都で日本文学・日本文化を学ぶということ」のタイトルのもとに、中本大教授、赤間亮教授と活発な議論が交わされた。またワークショップとして「立命館の「知」の財産・資料発掘・整理とその研究」を開催。武田悠希氏、李増先氏、白井かおり氏、大

坪舞氏(司会)が登壇、それぞれの立場から立命館大学所蔵資料などを中心に話され、資料の扱い方について多くの実務的訓練がなされてきたことが報告された。

また本年度は、海外の日本文学研究者、作家らの来訪が多くあった。大学院日本文学専修のレクチャーシリーズ(全四回)を開講し、今、世界では日本文学に関してどのような研究や創作がなされているかをじかに聞くチャンスとして、院生だけでなく学部生にもオープンに参加を呼びかけた。多くの学生参加者があった。

第一回にはオスロー大学の安倍オースタッド玲子(Reiko Abe Auestad)教授を迎え、「アフェクト論と漱石」(六月三日)を開催した。二〇一四年四月にはミシガン大学で「漱石の多様性」という大きな会議が催され、四三本の刺激的な発表が行われた。安倍氏もそこに参加したが、当日の様子なども交えながら、新しい研究の側面が示された。なお、この発表はのちに「心」を攪乱する情動―『彼岸過迄』をヒン

トに『ころ』を読み直す―』として『文学』二〇一四年一・二月号に日本語で活字化されている。

第二回は七月一日に開催。ニューメキシコ大学のアンドレ・ハーグ(Andre Haeg)専任講師は、博士論文の制作のため、本学の客員研究員として日本に滞在したが、やはり「漱石の多様性」コンファレンスに出席した論文の一部をここで発表した。演題は、「どうして、まあ、殺されたのでしょうか?―漱石と(反)植民地主義の暴力 Why was he...well...killed?―Naosumi Sōseki and (Anti-)Colonial Violence―」である。

第三回は七月二三日に開催されたが、ケンタッキー大学のダグ・スライメーカー(Doug Slaymaker)教授による「Paris Mon Amour 藤田嗣治金子光晴らのパリ体験」で、日本人作家の渡航体験と作品との関係について多様な側面からその実相を追求した。

第四回は後期の十一月二六日に、パリに在住してフランス語で詩や評論を書き高い評価を受けている関口涼子氏

をお招きして講演会と朗読会「Erie Double—ふたつの言葉で書くこと—」二重に書くこと」を開催した。関口氏は翻訳家としても著名で、その二つの言語の間を往還する体験の中から、どのように言語と感情を重ね合わせていくかが繊細に語られて感銘を受けた。

日本文学研究学域として七月一五日に学術講演会を主催した。本学とも関わりの深いヴェネチア大学のアルド・トリニー (Aldo Tolin) 教授をお招きして「日本仏教の翻訳をめぐる—道元禅師を中心に—」を本学域の学生、また専修の大学院生を中心に二百名以上の聴衆を得て、大変に盛会であった。ここでも日本文学が海外に翻訳されることの意味と意義、そしてその困難さと共鳴への可能性が語られ圧巻であった。

二〇一四年度に本学と県立神奈川近代文学館および公益財団法人神奈川文学振興会との協定締結が行われマスコミでも話題となったが、こうした人文系の機関が相互に手を結び合うことの意味は大変に深い。本学がそれを率先

して実行して、特に文学部、そのなかでとりわけ日本文学研究学域が中心的な働きを示し、これからこの連携を有意義に進行させていく契機を持ったことは大変学域にとっても嬉しいことである。その記念フォーラムとして「いま文学が語ること—これからの文学と文学研究—」を一月二七日に開催した。作家で神奈川近代文学館の館長である辻原登氏の記念講演のあと、川口清史学長らと交え、パネルディスカッションが行われた。本学客員研究員のエマニュエラ・コスタ氏、本研究科の武田悠希氏ら学生による討議が中川の司会のもとで進行したが、実作者を交えながら大学総長が加わって討議するという企画は日本の大学ではそんなにあることではないように思う。文化的な側面に力を入れる大学の方向が示されて好評のうちに結ばれた。

本年の文学旅行は神奈川近代文学館の訪問をメインに組まれ田口道昭教授が引率した。文学旅行も来年度から制度の変化があり、存続については検討中である。大学のさまざまな発展によ

っていろいろな制度的転換や変換があるわけだが、六〇年の伝統を基礎に据えながら、現代にきちんと向き合った研究状況の保全、発展にますます力を尽くしていきたいと考えている。大方のご協力を仰ぎたい。

(中川成美)